「市民運動家」首相と「なでしこジャパン」主将

東洋学園大学現代経営学部　教授　木村　壮次

被災地のことを思えば我慢するのは当然であるが，節電の夏は本当に厳しかった。企業は土日出勤を実施したり，お店も懸命の節電対策を行った。大学の教育環境もかなり厳しく，学生や教員の不満が充満していた。こうした国をあげての節電対策の中で奇妙なのはテレビ業界であった。もちろん，テレビでは「節電しましょう！」と呼びかけていたが，そのテレビ局自身の節電対策は納得しがたいものであった。番組制作に伴う電力消費や各家庭のテレビ受像機も大量の電力を消費しているはずである。震災や原発関連についてのニュースは，どの局も同じで，番組も似たりよったりである。国民に電力危機や我慢を訴えるのならば，率先して放送時間を制限したり，テレビ各社が持ち回りで番組を制作するなどの節電のための努力をしてほしかった。

政治面の方は，首相の評判が依然として悪く，日本の先行きに不安を与えている。相変わらず「市民運動家」的センスで「脱原発依存の記者会見」を行い，その中身は経済界や海外からも大きな批判を受けた。さらにマニフェスト（政権公約）を今頃になって「見通しが甘かった」と陳謝していた。国民にとっては選挙で騙されて投票をしたようなものである。ともかく，猛暑の中の節電，放射能汚染，政治のもたつき，経済の先行き不安などから，多くの国民はイライラの夏であった。

そうした中で，日本人に勇気と希望，諦めないことの大切さを教えてくれたのはサッカーの女子ワールドカップ（W杯）ドイツ大会で優勝を成し遂げた「なでしこジャパン」の快挙であった。窮地に追い込まれても頑張り，笑顔でチャレンジすることの重要さも教えてくれた。

「なでしこジャパン」は３連覇を狙った地元のドイツを完封し，決勝戦ではこれまで一度も勝てなかった世界ランク１位のアメリカを破っての優勝だった。敗れたアメリカでは，ワシントン・ポスト紙が，延長後半で同点ゴールを決め歓喜する沢穂希主将の写真を載せ，震災被災者を励ましたいという気持ちも勝利の原動力になったと解説していた。

「なでしこジャパン」をまとめ上げた沢主将は「震災後のこんなときにサッカーをやらせていただいて幸せです。勝つことで，人々に元気を与えられればいいと思っています」と試合前から被災地への思いを口にしていた。優勝後は「夢は見るものではなく，かなえるもの。夢を諦めずにやり続けてきた結果，優勝したのだ。夢を持って諦めずに頑張ってほしい」と見事に有言実行を果たした。同じシュショウでも，実行を伴わない「言葉だけ」「その場しのぎ」の「市民運動家」出身の菅首相と過酷な環境の中で実践してきた沢主将の人間としての器の違いは大きいと感じた。優勝報告のために訪れた官邸で，「首相」が「主将」に「教えを乞いたい」と述べたらしいことには，あきれるとともに納得させられた。「言葉だけ」でなく本当に教えを乞うべきであろう。

多くの国民は，女子のサッカー環境が男子に比べて極めて劣悪であったということを優勝後に知らされた。経営難などから活動休止を余儀なくされたクラブは多く，サッカーに専念できるプロ選手はわずかで，仕事をしながら夜に練習する選手がほとんどであったという。政府の「事業仕分け」でスポーツ強化予算が削減されたなかでの優勝は，他のスポーツ選手の刺激にもなった。国民に勇気と希望を与えるスポーツ・科学に対して政府はもっと支援すべきであろう。

優勝の瞬間，敗れたアメリカの選手を抱きしめた宮間あや選手は，「大和なでしこ」らしい振る舞いで，アメリカでも賞賛されていたという。GKの海堀あゆみ選手たちは「優勝できたのは女子サッカー界の歴史を築いてくれた大先輩やスタッフのおかげです」と口々に先輩や支えてくれた人たちへの感謝の気持ちを述べていた。これも本来の日本人が持っていた心遣いである。９月のロンドンオリンピック予選も沢主将のもとで勝ち抜いて欲しい。

※記事・写真等は（財）建設物価調査会の許諾を得て転載しています。
著作権は（財）建設物価調査会に帰属。記事、画像等の無断転載は一切お断りしま